

社交不安症と対人恐怖症の比較 —自己主体感と友人関係への動機づけとの関連の検討—

HP26-0045F 中西由紀奈

問題・目的

対人恐怖症と社交不安症はどちらも対人状況において過度の不安や恐怖を感じ、他者からの否定的な評価を恐れる障害です。DSM-5では同一の疾患として扱われていますが、対人恐怖症は他者の感情を主体にする他者主体性、社交不安症は自分の感情を主体にする自己主体性が強く見られます。そのため、社交不安症と対人恐怖症では症状に対する認知や対人場面そのものに対する認知に違いが生じる可能性があります。例えば、ある行為を自分自身で行っているという感覚の程度、対人場面において行動するための理由が違うかもしれません。前者を自己主体感、後者を動機づけと言います。先行研究において自己主体感と社交不安症、動機づけと対人恐怖症の関連は検討されています。しかし自己主体感と対人恐怖症、動機づけと社交不安症の関連はまだ調べられておらず、社交不安症と対人恐怖症を比較して検討することもまだ行われていません。そこで本研究では自己主体感と動機づけを用いて対人恐怖症と社交不安症を比較しました。

方法

質問紙調査を行いました。調査対象者は大学生 134 名(男性 40 名, 女性 94 名)で、平均年齢(標準偏差)は 20.42 歳(1.37)でした。社交不安症の恐怖・不安と回避の症状の測定には、Liebowitz Social Anxiety Scale 日本語版(LSAS-J; 朝倉・井上・佐々木・佐々木・北川・井上・傳田・伊藤・松原・小山, 2002)を、対人恐怖心性の測定には対人恐怖心性尺度(堀井・小川, 1996; 1997)を、自己主体感の測定には自己主体感尺度(浅井・高野・杉森・丹野, 2009)を、友人関係への動機づけの測定には友人関係への動機づけ尺度(岡田, 2005)を用いました。

結果・考察

LSAS-J と自己主体感、対人恐怖心性と自己主体感、LSAS-J と動機づけ、対人恐怖心性と動機づけの相関係数をそれぞれ算出し、相関係数の差の検定を行いました。その結果、動機づけのうち、個人の内の重要性を理由とする同一化的理由において有意な差が見られました。偏相関分析では、単純相関において見られた LSAS-J と自己主体感の関連が見られなくなりましたが、対人恐怖心性は自己主体感と関連しました。また、動機づけのうち、個人のポジティブな感情を理由とする内発的理由は単純相関においてどちらも関連が見られませんでした。偏相関分析では LSAS-J と正の相関、対人恐怖と負の相関が見られました。以上のことから自己主体感と他者主体感の違いは症状の程度や症状に対する認知、対人場面に対する認知に影響を与える可能性が示唆されました。